

2012年度 研究所・センター事業報告書

研究所・センター名	地域情報研究センター
研究所・センター長名	上子 秋生

I. 研究実績の概要（公開項目）

本欄には、研究所・センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、研究所総合計画(5ヵ年)および2012年度重点プロジェクト申請調書に記載した内容に照らし、項目立てなどをおこなうことができるだけわかりやすく記述してください。なお本欄は、研究所・センターの総括として使用いただき、プロジェクトごとの詳細な実績報告は、別紙「重点プロジェクト実績報告書様式」(非公開)に記述のうえ提出ください。

地域情報研究センター（以下、地情研）では今年度も中長期計画に基づき、地域コミュニティの安全・安心や持続可能な開発等に関連する、地域社会のコンテクストに深く根差した実践的な政策研究を推進するための研究基盤として、機能強化と充実を推し進めた。具体的には、以下の通り3つの重点プロジェクトを行った。

1) 地域復興計画研究フォーラム

東日本大震災以降、地域防災やエネルギー政策に関する様々な社会問題が顕在化した。地震大国日本においてそれらの諸問題は、甚大な被害を受けた東北地方のみならず、全ての地域の人々がこれから直面するであろう深刻なものである。地情研では、学内外の研究者による学際的な研究知見が創出される場を支援し、これからの日本の復興と安全・安心の確立に向けた政策科学的な貢献を実現するために、本重点プロジェクトを実施した。まず、原子力発電所が集中的に立地する福井県嶺南地域をフィールドとして、3・11以降の原発のあり方が地域社会においてどのように捉えられているのかについて、実証的な調査研究を実施した。また、アジアのエネルギー安全保障政策におけるパートナーシップが将来的に必要となるモンゴルとの研究交流を実施した。その一方で、震災関連の研究者ネットワークは、当初の計画よりも不十分な結果に終わった。多岐にわたる研究テーマの長期的な方向付けやコンセンサスの蓄積が未だ十分ではなく、今後の課題となっている。

2) 二酸化炭素削減に向けた地域社会の主体に基づくカーボンマイナス研究プロジェクト

二酸化炭素などの温室効果ガスの抑制と、地域社会の経済的な活性化は、自然と人間社会を調和させ、持続可能な発展を可能にするために解決しなければならない喫緊かつ重大な課題である。本重点プロジェクトは、京都府亀岡市を実証フィールドとして、農地炭素貯留技術による炭素クレジットの創出と、環境保全型ブランド野菜の普及を推進し、そのような課題の解決を目指すものである。本年度地情研は、他大学（龍谷大学 LORC・京都学園大学）や行政（亀岡市）、学術組織（日本バイオ炭普及会・森林総研）と共同で、農地炭素貯留の認証機関およびブランド野菜の生産者組合を組織化するなど、研究プロジェクトの基盤づくりを順調に進めることができた。学術的な研究成果（簡易的な固定炭素量の定量法や LC-CO₂ のシナリオ評価など）の発信にとどまらず、取り組みの社会的な還元も同時に進んでおり、環境大臣賞の受賞など社会的な評価も高まっている。

3) 地域情報・地域政策・地域の頑強性に関する安心安全分野の国際研修・研究支援プログラム

インドネシア政府より地域防災等の課題に取り組んでいる研究員を受け入れ、地情研や政策科学部のスタッフによる研究指導と、本学の大学院生や留学生との研究交流を実施した（Staff Enhancement Program, Professional Human Resources Development Project/National Development Planning Agency）。また、地域社会の持続可能性をテーマとした政策研究を公募し、1件の萌芽的テーマのフィールド研究に対して助成を行った。それぞれの成果については、地情研の紀要に概要と論文を掲載している。EPUB形式による紀要の公開も昨年度と同様に行っており、地情研のウェブサイトを経由して、iPad等のタブレット端末で研究成果を閲覧することができる。

以上のような成果の一方で、新キャンパス移転後の研究展開については、未だ検討中の課題として残されている。経営学部の研究所/センター（デザイン科学、イノベーション・マネジメント、MOT、医療経営の4領域）との共同研究プロジェクトを始めとして計画準備が進行中であり、地情研の学際化を今後も推し進めていく。

II. 研究業績（公開項目）

1) 論文発表

①論文（査読あり）

雑誌論文

図書

②論文（査読なし）

雑誌論文

1. 田麿裕祐・柴田晃・鐘ヶ江秀彦, 「農地炭素貯留による村域開発の可能性と諸課題—亀岡カーボンマイナスプロジェクトを事例として」『創地共望—立命館大学地域情報研究センター紀要』立命館大学地域情報研究センター, 2, 71-80, (2013)
2. 西出崇・苅谷千尋・宮浦崇, 「地域復興計画研究フォーラム 若狭湾周辺地域調査報告—原子力発電所集中立地地域における震災の社会的影響」『創地共望—立命館大学地域情報研究センター紀要』立命館大学地域情報研究センター, 2, 92-100.

図書

1. 鐘ヶ江秀彦, 「16 章 環境持続性と地域活性化 16.4 炭素埋設農法を通じた持続可能な地域開発「亀岡モデル」」大貝彰・宮田譲・青木伸一（編著）『都市・地域・環境概論—持続可能な社会の創造に向けて』朝倉書店（2013年4月）
2. 鐘ヶ江秀彦, 「第3部 サステナビリティの構築（気候変動への対応）災害と都市」周瑋生（編著）『サステナビリティ学入門』法律文化社（2013年4月）
3. 鐘ヶ江秀彦・豊田祐輔, 「8 章 災害体験を教訓に変える—ゲーミングによる「気づき」と「共有」の防災学習」立命館大学「テキスト文化遺産防災学」刊行委員会編『テキスト文化遺産防災学』学芸出版社（2013年3月）

2) 学会発表

①海外での発表

1. Yusuke Tanabiki, “How can we support local farming? :a brief introduction of Cool-Vege,” Biochar colloquium, James Hutton Institute, Aberdeen, 2012年8月13日.

②国内での発表

1. Akira Shibata, “GHG Reduction at Farmland & Area Brand Agricultural products to sustain the environment(Cool Vegetable),” 日伯バイオチャーシンポジウム, 九州大学, 2012年8月27日.
2. 本多 彩夏・田麿 裕祐, 「炭素貯留野菜クルベジ®の需要感度に関する研究」, 第10回木質炭化学会大会, 岩手県盛岡市, 2012年6月28日.
3. 柴田 晃, 「農地土壌における炭素貯留と GHG 発生抑制を通じた農業活性化と地域開発」, 第10回木質炭化学会大会, 岩手県盛岡市, 2012年6月28日.
4. 井上 芳樹・柴田 晃, 「日本バイオ炭普及会（JBA）バイオ炭規格案—難分解性炭素の検討」第10回木質炭化学会大会, 岩手県盛岡市, 2012年6月28日.

3) 省庁、学会、財団などの表彰

1. 低炭素杯 2013, 環境大臣賞金賞（地域活動部門）, 「農地炭素貯留技術を用いた農作物のエコ・ブランド化と地域活性化」, 柴田晃, 2013年2月16日.

4) 外部資金獲得（競争的研究費、共同研究、受託研究、奨学寄附金等）

1. 受託研究, 亀岡市, 2012年度, 「亀岡カーボンマイナスプロジェクトに係る調査研究」柴田 晃, 50万円
2. 競争的資金, 文理融合・文系産学連携促進事業, 2012年度, 「農地炭素貯留とブランド野菜による地域開発スキームの研究と実践」, 柴田晃, 80万円
3. 競争的資金, 立命館大学東日本大震災にかかる研究推進プログラム, 2012年度, 「防災拠点としての大学とコミュニティ防災の連携によるリスク緩和の方策に関する研究」鐘ヶ江秀彦, 100万円

4. 競争的資金, インドネシア政府, 2012 年度, 「インドネシア政府防災研修」鐘ヶ江秀彦, 800 万円
5. 競争的資金, アジアシード財団, 2012 年度, 「インドネシア政府訪問調査」鐘ヶ江秀彦, 125 万円
6. 競争的資金, 独立行政法人日本学術振興会二国間共同研究事業, 2012 年度, 「観光地における避難準備へ向けた大学・地域連携による情報マネジメントモデルの開発」鐘ヶ江秀彦, 137 万円

5) 特許

①出願

②取得

6) その他（報道発表、講演会等）

①報道発表

1. 「クールベジタブル販売：亀岡の農家 CO₂ 削減農法で栽培」京都新聞朝刊, 2012 年 9 月 5 日.
2. 「地球を冷やせ 新鮮野菜：CO₂ 減らず炭素埋設農法実る」朝日新聞朝刊, 2012 年 9 月 13 日.
3. 「クールベジタブル：知名度と安定供給が鍵」京都新聞朝刊, 2012 年 10 月 24 日.
4. 「放置林の竹で炭づくり：畑に混ぜ野菜栽培」京都新聞朝刊, 2013 年 1 月 22 日.
5. 「亀岡カーボンマイナスと地球環境変化」京都新聞朝刊, 2013 年 1 月 28 日.

②講演会

1. 柴田晃, 「農地GHG削減と環境保全農産物（最近のクルベジの状況）」, 第 13 回エコカーボン研究会, 明星大学, 2012 年 8 月 3 日.
2. 柴田晃, 「二酸化炭素削減野菜クルベジとその販売」, 亀岡クルベジ育成会, 亀岡市役所, 2012 年 8 月 8 日.
3. 柴田晃, 「農地GHG削減と環境保全地域ブランド農産物クルベジ」, 越前大野市バイオマス活用会議, 2012 年 8 月 30 日.
4. 柴田晃, 「GHG Reduction at Farmland & Area Brand Agricultural products to sustain the environment (Cool Vegetable)」, OECD-LORC国際ワークショップ, 亀岡市役所, 2012 年 9 月 28 日
5. 柴田晃, 「農地土壌における炭素貯留とGHG発生抑制を通じた地域農業ブランド開発と持続可能な社会システム」, 平成 24 年度九州沖縄農業試験研究推進会議 生産環境部会土壌肥料研究会, 2012 年 10 月 4 日
6. 柴田晃, 「地域振興と環境保全農作物クルベジ」, 千葉クルベジ研究会, 立命館大学東京オフィス, 2012 年 10 月 10 日.
7. Akira Shibata, “GHG Reduction Area Brand Agricultural Products to sustain the Environment (Cool Vegetable)” Jogjakarta Cool-Vege Workshop, 2012 年 11 月 28 日.
8. 鐘ヶ江秀彦, 「コミュニティ防災の課題」, 立命館大学産業社会学会 東日本大震災連続フォーラム 第 3 回「震災から何を学ぶか—3. 11 から見えた日本社会—災害に負けない社会をつくる」, 立命館大学, 2012 年 6 月 10 日

③その他

なし

以上